

## 地方自治体と協働した実践的な学芸員教育の試み

中島金太郎、落合 知子、中野 雄二、盛山 隆行  
鐘ヶ江 樹、鐘ヶ江 幹、太田 直宏、田川 太一  
中武 秀元、吉岡 和、太田 千晴、近藤あかね  
築城ひかる

# 地方自治体と協働した実践的な学芸員教育の試み

中島金太郎\*1、落合 知子\*2、中野 雄二\*3、盛山 隆行\*3、鐘ヶ江 樹\*4  
鐘ヶ江 幹\*4、太田 直宏\*5、田川 太一\*5、中武 秀元\*5、吉岡 和\*5  
太田 千晴\*5、近藤あかね\*5、築城ひかる\*5

## はじめに

長崎国際大学博物館学芸員養成課程（以下、本学）は、「全国大学博物館学講座協議会西日本部会令和元年度研究助成」に応募し、「地方自治体と協働した実践的な学芸員教育の試み」が採択された。本研究は、平成30（2018）年に協定を締結した波佐見町教育委員会（以下、町教委）との博物館・博物館学を核とした連携の一環として、学生に対する実践的な学芸員教育の実施と令和3（2021）年度に新設される「波佐見町歴史文化交流館（仮称）」への資料提供を目的に実施した。本稿は、上記助成事業および関連する事業の実践成果をまとめ、実践的な学芸員養成について一考するものである。

（中島）

## 1 研究の概要

### 1. 波佐見町との連携の経緯

町教委との連携は、本学が平成27（2015）年11月から波佐見町歴史文化交流館（仮称）の建設構想に参加したことに始まる。それ以来両者の協力体制が築かれ、多くの活動を推進してきた。それらの活動が実践できたのは、本学の学長裁量経費採択事業によるところが大きく、以下に学長裁量経費採択事業を中心とした連携の経緯を記すものである。

### ①学長裁量経費と上海大学博物館学研修

平成27年度学長裁量経費に「留学生への博物館学の啓発と博物館学教育の質的向上の実践」、平成28年度学長裁量経費に「博物館学課程のグローバル化に向けた上海大学博物館学研修の実践」、平成30年度学長裁量経費に「地域文化資源を活用したMLA連携による博物館展示教育の実践」、令和元年度学長裁量経費に「産官学が連携したミュージアムグッズ製作の実践」が採択され、通算4年間に亘り長崎国際大学の研究助成を獲得することができた。それにより博物館学芸員課程における教育の質的向上、博物館学の啓発事業の展開が可能となった。

\* 1 長崎国際大学 助教

\* 2 長崎国際大学 教授

\* 3 波佐見町教育委員会

\* 4 長崎国際大学 大学院生

\* 5 長崎国際大学 学生

本学は国際大学という特徴からも留学生の受入れは万全であり、博物館学芸員の資格取得に対しても留学生に開かれた課程を推進している。平成28年に上海大学博物館と協定が締結され、その年から上海大学博物館学研修生を受入れることになり、その基盤整備として「博物館学課程のグローバル化に向けた上海大学博物館学研修の実践」が平成28年度の学長裁量経費に採択され、充実した研修内容を実践することができた。

上海大学博物館学研修は、博物館学を中心として、茶道体験など日本文化を学ぶことができることが特徴であるが、フィールドワークとして波佐見町での窯業体験を取り入れていることも大きな特徴と言える。波佐見町の研修は、学芸員の講義の他に、やきもの体験、登り窯火入れ体験など波佐見町の地域文化資源を活用した研修内容である（落合2017）。

### ②ICOM UMAC AWARD 2019の受賞

このような上海大学博物館学研修が、2018年12月にICOM UMAC AWARD 2019のトップスリーにノミネートされ、令和元（2019）年9月に開催されたICOM京都大会で世界2位（SECOND PLACE）を受賞した（写真1）。地方大学の小さな取組みが国際的な博物館組織から大きな評価を受けるに至ったのは、町教委との連携活動が要因の一つと言える。町教委学芸員による地道な活動と、グローバルな博学連携事業が大きく実を結び、ICOMの歴史に刻まれたことは波佐見町にとっても有意義な事業となった。



写真1：ICOM UMAC AWARD 2019 受賞の様子

### ③MLA連携事業

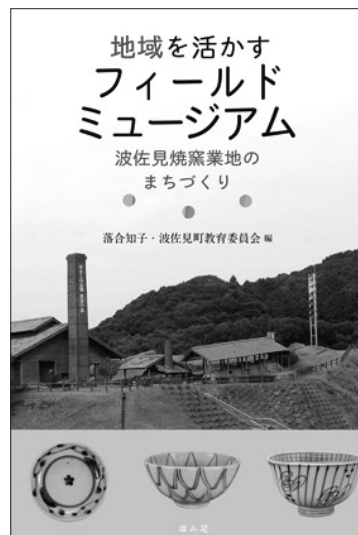
平成30年には波佐見町と包括協定が締結され、より一層の協力体制が構築できた。平成30年度学長裁量経費採択事業の「地域文化資源を活用したMLA連携による博物館展示教育の実践」では、本学における事業の展開と波佐見町における事業の展開を推進した。本学における事業としては、学芸員による公開講座の開講や波佐見焼の展示を開催し、ゲスト講師としての学生指導は毎年継続している事業である。課外活動として、古文書研究会（現、地域文化研究会）を立ち上げて、学生たちのみならず地域住民も取り入れた定期的な古文書勉強会を行っている。波佐見町における事業としては、地域文化資源の悉皆調査を学部生と大学院生が中心となって行い、報告書『平成30年度長崎国際大学学長裁量経費採択「地域文化資源を活用したMLA連携による博物館展示教育の実践」実施報告書』を発刊した。

このMLA連携は、博物館学（Museology）、大学図書館（Library）、行政（Administration）の三者連携の試みで、町教委所管の各種資料、本学の図書館が有する関連図書等を有機的に組み合わせ、展示の手法をもって情報発信する試みであり、大学が有する調査・研究能力を活かし、地方創生に向けた官学協働の取り組みと換言できるものであり、他に例を見

ない独創的な研究と言えるものである。大学院教育として実践した展示技術の指導と展覧会活動の実践は、学芸員を目指す学生の知識と技術の向上を図ることができ、これらの学内展示は本学学生と教職員に対する博物館学の啓発となった（長崎国際大学博物館学芸員課程2019）。

#### ④『地域を活かすフィールドミュージアム－波佐見焼窯業地のまちづくり－』の刊行

本学と町教委の連携で特筆すべきは、共編『地域を活かすフィールドミュージアム－波佐見焼窯業地のまちづくり－』（雄山閣）の刊行である（写真2）。本著は令和3年度に開館する「波佐見町歴史文化交流館（仮称）」の学術研究書の第1号として刊行したものであり、平成30年に長崎国際大学と波佐見町が包括協定を結び、地道な交流事業を実践してきた証でもある。また、本著の特徴は長崎国際大学の博物館学教員のみならず、本学大学院生に執筆の機会を与えた点にある。これは単行本共著という大きな業績を付与させる本学博物館学教育の方針でもあるが、まさにMLA連携による波佐見町文化資源の調査研究の結果であり、官学連携事業による大きな成果と言える（落合、波佐見町教育委員会2020）。



（落合）写真2：『地域を活かすフィールドミュージアム－波佐見焼窯業地のまちづくり－』

## 2. 研究の背景と目的

本研究は、博物館学芸員課程履修生が主体となった地域文化資源の調査と企画展示の実施から、より実践的な知識・技術を有する学芸員養成を試みたものである。具体的には、博物館学芸員課程履修生が主体となって町内文化財を調査し、得られた成果を精査して企画展示の形で発表することにより、学芸員の実務体験から実践的な学芸員教育を行った。調査から資料を収集し、それを研究して展示を通して市民に還元することは学芸員に必須の職務で、求められる技能であり、学生時代に当該技能を習得させることは、現場で活躍できる学芸員を養成することに繋がると判断したことに起因する。

また、本学と包括協定を締結している波佐見町は、中世末から始まる「波佐見焼」の産地として全国的に有名であり、町内には数多くの窯業関連文化財が点在している。同町では、歴史的建造物を転用した人文系博物館である「波佐見町歴史文化交流館（仮称）」の開館を令和3年度にひかえ、資料収集・展示作成を急ピッチで進めている。しかし、町内の地域文化資源調査の必要性は増加しているものの、石造文化財をはじめ未調査の文化財が多々存在しているのが現状である。本研究では、同町学芸員と本学教員・学生が町内文化財に関する共同調査を行うことで、これまで周知されていなかった地域文化資源を発見し、新設される「波佐見町歴史文化交流館（仮称）」に新たな地域文化資源の提供も意図した。

本研究を実践することで、大学側は人材育成、町側は新設館への資料提供といった双方

に利益がもたらされることが想定された。

(中島)

### 3. 協議及び事業の推移

#### ①研究開始以前、事前協議

波佐見町との連携は、長きにわたって実践してきたことは先述の通りである。本研究のテーマとした大サコ墓地の調査は、平成30年度に採択された長崎国際大学学長裁量経費事業「地域文化資源を活用したMLA連携による博物館展示教育の実践」において、郷土の偉人三岳半蔵智利（智則）に関する資料の調査など一部実践したが（長崎国際大学博物館学芸員課程2019）、墓地全体の年代把握や遺存している陶磁器等の調査は実施していなかった。

令和元年5月に町教委中野雄二学芸員、盛山隆行学芸員と落合、中島が協議し、全国大学博物館学講座協議会（以下、全博協）西日本部会研究助成への応募、および研究の進め方や方針について同意を得た。本研究は、①大サコ墓地の墓石の碑文調査、②墓地内の表面採集（以下、表採）調査および整理作業、③研究成果の展示、④公開講座の4つの行程で実施することが確認された。

#### ②研究に関する協議

令和元年11月9日の全博協西日本部会大会（福岡大学）で研究助成が採択され、12月3日に本学と町教委学芸員で事業の進め方について協議した。その際に、①表採調査の実施を令和2年1月に設定、②調査・展示テーマの詳細の2点を決定した。令和2年3月17日に協議を実施したのち、新型コロナウイルス感染症の影響（以下、コロナ禍）で研究の中断を余儀なくされた。令和2年5月18日、6月15日、7月17日にそれぞれ協議を実施し、コロナ禍における研究方法について検討した。9月17日に研究成果のまとめ、今後の事業の進め方に関する協議を併せて実施した。

#### ③現地調査

令和2年1月25日に第1回現地調査（表採調査）を実施し、落合、中島、中野・盛山両学芸員、学生4名の計8名が参加した。コロナ禍による中断期間を挟んで5月に研究を再開した。25日には、第2回現地調査として万治3年の墓碑銘の拓本採取（以下、採拓）を実施し、6名が参加した。7月20日には第3回現地調査（墓碑銘の確認）を行い、5名が参加した。7月末に展示を施工したが、墓地全域の墓碑銘の確認が終了していなかったため、9月～12月にかけて墓碑銘に関する補足調査を実施し、12月4日にすべての現地調査を完了した。

#### ④整理作業

令和2年3月17日には、表採資料の洗浄作業を実施した。コロナ禍による中断期間を挟んで5月25日に洗浄作業、6月1、8、15日、7月6日には注記、台帳化作業を実施した。また、8月27日には採拓した墓碑銘の中で、展示に使用しなかった拓本の裏打ち作業を行

い、展示終了後の10月22日には展示に使用した拓本を裏打ちした。

## ⑤展示作業

令和2年7月26日の本学のオープンキャンパスに合わせて企画展示の開催を計画し、整理作業に並行してパネル・題箋・ポスターを制作した。また、7月20日に波佐見町より資料搬出、23日に展示を施工した。また、10月9日には展示の撤収作業を行い、12日に資料を返却した。

(中島)

## 2 研究の方法

### 1. 現地調査

本研究では、大サコ墓地の発生年代および変遷の把握を目的としたことから、年代が直接的に把握できる墓石の年号(没年)の記録と、供献されていた陶磁器からの年代把握を意図した。本方針に伴い、現地調査は表採調査と墓石調査の2手法を用いて実施した。

表採調査は、主に考古学の研究手法として採用される調査方法で、地表面に散布している土器や石器等の遺物を拾い集めて比較し、遺跡の有無の把握や大まかな遺跡の性格や年代を把握する手法である。発掘調査と違い地面を掘削しないため、地中の遺跡を傷つけることがなく、また地表面を占有している構築物がある場合にも、それを除去せずに遺物を採集できることが利点である。本研究では、発掘調査が困難な墓地の実態解明のために土地への影響の軽微な表採調査を採用し、大サコ墓地の地表面に散乱していた大量の陶磁器を採集した。大サコ墓地では、各家の墓域が明確に区切られており、各墓域の端部に陶磁器片が比較的まとまって廃棄されている様相が見て取れた。今回は、調査班を2つに分け、各家の墓域ごとに採集して回った(写真3)。



写真3：表採調査の様子

墓石調査は、墓石の年代把握を目的とし、大サコ墓地内の明治時代以前の墓石の記録調査を実施したものである。墓石には、戒名や没年、宗派などの各種情報が刻み込まれており、当該情報を収集・分析することで、被葬者の把握は勿論、特定の時代における墓域の平面的な分布等も把握することができる。墓石調査では、墓石および石塔類の総高・幅・奥行きを計測し、計測作業と並行して、墓石の表面及び側面に示された年号・文字の解読を試みた(写真4)。



写真4：墓石調査の様子

また、表採調査に並行して、古い年代の墓

石の拓本を採集した。これは、墓地の発生日代の把握に加え、本学での展示資料の制作と交流館の収蔵資料の増加を目論んだものである。大サコ墓地最古の墓石の採拓作業は本学学部生の王楷之が担当し（写真5）、近世期の採拓作業は、中島助教、大学院生の鐘ヶ江樹、学部生の吉岡和が主に実施した。

（中武、吉岡）



写真5：拓本採取の様子

## 2. 整理作業

本研究では、近世～近現代の陶磁器資料を中心に711点の資料を採集し、その基礎的な整理作業を行った。今回は、考古学の発掘調査で使用される整理作業の手法として、洗浄、注記、接合、および台帳化作業を行った。

### ①洗浄

洗浄作業は、3月17日に第1回、5月25日に第2回の作業を実施した。洗浄作業では、採集した資料に付着していた泥などの汚れを、水とブラシを使用して落とし、乾燥させた（写真6）。



写真6：洗浄作業の様子

### ②注記

注記作業は、6月1日と6月8日に実施した。注記作業には、ポスターカラーの黒色と面相筆を使用し、採集した資料の断面に「大サコ墓地」、「採集年月日」の略称として「大サコ墓採2020.1/25」と記入した。

### ③接合

接合作業は、6月8日に実施した。中野学芸員から採集陶磁器の基本的な性質について講義を受け、それを踏まえて陶器と磁器に分類し、大多数を占めた磁器は内部の釉薬の有無に基づいて、皿・茶わん類と花瓶・徳利類に分類した。その後、採集資料の中から同一個体を搜索し、同一個体同士を接着剤「セメダインC」を用いて接合した。

### ④台帳化作業

台帳化作業は、6月15日と7月6日に実施した。はじめに採集した資料に通し番号を振り、個別に写真撮影した。撮影を行う際に壁と机にグレーの背景紙を張り、三脚・ストロボを使用した。また、各資料の撮影時には、通し番号をナンバリングとして挿入した写真、表面、裏面の最低3葉の写真撮影し、必要に応じて断面や特徴的な部位を撮影した。その後、撮影が完了した資料の長辺・短辺・厚さを計測し、名称、製造年代などと共に台帳





の写真を掲載し、それぞれ実施した過程、使用した道具、台帳の記載内等について説明した。

### 「波佐見町湯無田郷と大サコ墓地」

本パネルは、4年生の太田直宏と2年生の太田千晴が担当した。内容及び特徴は、本研究の調査対象である大サコ墓地が所在する波佐見町湯無田郷と大サコ墓地の概要、墓地内の墓域分布について説明し、町域の地図や航空写真を用いて時代ごとに墓域を分布し、色分けを行っている。また、文章内の重要語句は赤文字で強調した。

### 「大サコ墓地採集陶磁器について」

本パネルは、4年生の田川太一と3年生の吉岡和が担当した。内容及び特徴は、墓地とその周辺に廃棄された陶磁器調査の目的を説明し、地表面から採集された陶磁器を「1. 近世（江戸時代）」、「2. 近代（明治時代～昭和20年）」、「3. 現代（昭和20年～）」の大きく3期に区分した。

(田川、太田直)

### ②ポスター制作

本展示の基本的な展示資料は陶磁器であり、ポスター制作にあたっては表採資料の中でも大半を占める「磁器」を印象的に表すことを意図した。波佐見焼の磁器は、地の白と染付の青のコントラストが極めて印象的であり、今回のポスターは白・青と背景の黒を基本色とした。ポスターは、第一次調査時に表採した資料の内、近世から近代に焼かれたもの且つ白地に青の染付があるものを選択し、それらの資料が重ならないよう黒背景の上に配置した。ポスターに使用した磁器片は全て表採資料であり、全て別個体でもある。当該資料を整然と配置することにより、大サコ墓地に供献された磁器の豊富さ、豊かさを表現すると共に、近世～近代の波佐見焼の美しさを視覚的にも感じられることをコンセプトとした。また、ポスターのイメージに合致するよう、展示のタイトルは青背景に白文字で記述した(写真9)。

本展示のポスターは、会場である本学図書館に2ヶ所、研究棟内に2ヶ所、博物館実習室前に1ヶ所それぞれ掲示した。

(中島)

### ③展示施工

令和2年7月22日に、本学教員2名、大学院生2名で展示を施工した。展示には、大学所有のローケース2棹、展示パネル4枚を使用した。本研究は、「大サコ墓地」をキーワ



写真9：ポスター

ードとして文献史学と考古学の両面からアプローチした研究であり、展示も文献史学の学問領域である文字資料（拓本）と考古学の学問領域である陶磁器の両者を組み合わせて展示した（写真10）。

陶磁器資料は、表採した711点の中から町教委の中野学芸員が中心となって選定した26点と、表採資料と近似の性質を有する参考資料9点の合計35点を展示した。参考資料は、いずれもが波佐見町内で出土・伝世した資料

であり、表採資料と同紋あるいは同器種の資料を展示することで比較・対照することを目的とした。また、表採調査ではコンプラ瓶の底部を採集したことから、町教委所蔵の完形のコンプラ瓶と本学博物館学芸員課程で製作したオリジナルグッズのコンプラ瓶を比較資料として展示した。なお各資料には、名称と生産年代を記した題箋を付した。

文字資料は、大サコ墓地に所在する古い時代の墓石のうち、大サコ墓地最古の万治3年銘の墓石と、次いで古い正徳6年銘の墓石から採集した拓本を展示に使用した。万治3年銘の拓本は、A0サイズのアルミフレームに封入したうえでローケース上に配置し、正徳6年銘の拓本はローケース内に展示した。なお、墓石の釈文と解説は町教委の盛山学芸員が作成し、本学学生がパネル化したうえで拓本脇に展示した。

（鐘ヶ江樹、鐘ヶ江幹）



写真10：展示施工後の様子

### 3 大サコ墓地の概要

#### 1. 大サコ墓地の立地

大サコ墓地は、長崎県東彼杵郡波佐見町湯無田郷1247番地に所在する近世から続く墓地で、現在も波佐見町内の霊園として利用されている。大サコ墓地の概要を記すにあたり、本節では大サコ墓地の所在する湯無田郷の概要および大サコ墓地の立地について概観するものである。

#### ①地理的環境（図1）

湯無田郷は、波佐見町のやや東に位置し、郷内中央部に波佐見川が貫き、北部に山岳と野々川ダムを有する立地を呈している。野々川ダムの南部には桜の名所が存在するほか、ダム周辺は自然が豊かであり、秋には紅葉が美しい。西九州自動車道にも近く、佐世保市や佐賀県からのアクセスも良好である。また、郷は違うが「やきもの公園」が西部に隣接しており、陶器市の際には多くの観光客が訪れ

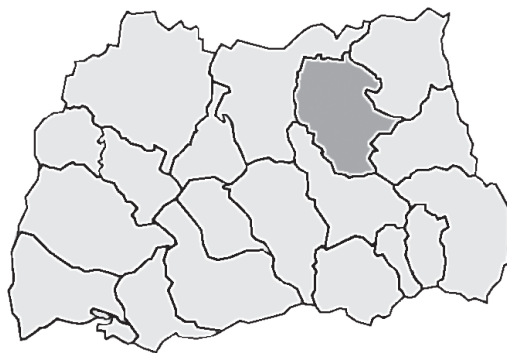


図1：湯無田郷の位置（太田千 作画）

る地域である。

## ②湯無田郷の由来

ユムタの起源は判然としないが、『郷村記』によると、温泉が「ぬくみ井出」の川中にある鳥淵の底の岩穴から湧出しており、当時村の郷士だった田中清左衛門が湯宿を建て浴室も作ったと言われており、当時は冷泉だったため焚火で沸かして入浴していた。その後、自然と湯気が薄くなり、普通の水となってしまったことが語源となって、この辺りの田が湯無田と名付けられたとされている。『郷村記』にある「ぬくみ井出」の所在地は、現在も不詳である。

## ③主な文化財（図2）

### ①陶山神社

波佐見金山の麓に建てられており、窯業の神、摩利支天、山の神が合祀されている。

### ②熊野神社

『郷村記』によると、かつて当地を治めていた内海修理亮泰平が、知多半島を追われて波佐見へ来るときに、和歌山県熊野大社のお札を持っていたことにより無事に故郷を脱出できたとされる。そこで、熊野権現のお社を建て、当該地域の守護神として祀ったのが由来とされている。境内には、大正中期に建てられた石造りのアーチ橋が現存している。

### ③西圓寺

寛永元（1624）年から20年に善空が開基し、光厳寺という古寺跡に草庵を結んだのが始まりとされる。寛文元（1661）年には内海の道端に一寺を建て、西本願寺から寺号が許されたことにより、「西圓寺」と称した。享保2（1742）年に現在の位置に寺を移転している。境内にはキリシタン墓地が存在するとされるが、詳細は不詳である。

### ④山中浮立（郷土芸能）

起源は不詳であるが、一説には元亀4（1573）年から天正19（1591）年頃とされている。毎年秋の彼岸に奉納され、笛や太鼓のリズムにあわせて舞浮立が披露される。

## ④大サコ墓地の立地

大サコ墓地は、湯無田郷の南部、陶山神社の近隣地に所在しており、約5,800㎡の墓域を有する。墓は山裾から丘陵部を造成した平坦地、さらには集落に接続する斜面地に分布しているが、相対的に高台に所在している墓が多い。令和2年現在約120区画の墓地が存在する。

（太田千、太田直）



図2：湯無田郷の主要スポット  
（太田千 作画）

## 2. 墓石を含む石造物から見た大サコ墓地の成立年代

大サコ墓地内の墓石調査を長崎国際大学教員、大学院生、学部生の有志および町教委文化財保護班学芸員とともに行った（長崎国際大学博物館学芸員課程2019）。特に江戸時代から明治時代の紀年銘を有する墓石について記録した結果をもとに、大サコ墓地の成立年代を考察したい。

### ①大サコ墓地の紀年銘最古の墓石

波佐見町は江戸幕府成立後、肥前大村藩領波佐見村となった。4代大村藩主・大村純長の治世、慶安4（1651）年～宝永3（1706）年に波佐見村上（上波佐見村）と波佐見村下（下波佐見村）に分村したが、それは大村藩内での分村で、江戸幕府へ届け出た文書では、一括して波佐見村と記された。藩内の重要産業である焼物の生産地、また藩内第一の広邑（広い村）で米作りの盛んな村として栄えた<sup>(1)</sup>。陶磁器生産と農業生産つまり、現在に至る陶農・波佐見の源流は江戸時代に形成されたと言っても良い（落合、波佐見町教育委員会2020）。なお、大サコ墓地が立地する湯無田郷は江戸時代、波佐見村上（上波佐見村）に属していた。

現在、大サコ墓地で確認できた紀年銘最古の墓石は、「南無阿弥陀佛 釈尼妙了靈 萬治三年七月十五日 一瀬助左衛門母」墓碑である。紀年銘の万治3（1660）年は江戸時代前期、江戸幕府4代将軍・徳川家綱の治世である。

同墓碑は1基のみ単体で存在し、既に無縁仏化しており、例えば一瀬家と言った一家墓地の中に存在していない。形状は自然石墓塔、寸法は高さ95cm、幅34cm、奥行24cm、材質は砂岩で、墓石上部から下部にかけて亀裂が走っており状態はあまり良いものとは言えない（写真11）。「南無阿弥陀佛」とは阿弥陀如来への帰依を表明する定型句であり、浄土宗や浄土真宗で用いる、いわゆる六字名号（念仏）と称する言葉である。「釈尼妙了靈」とは被葬者「一瀬助左衛門母」の戒名（釈尼妙了）と位号（靈）であり、戒名に「釈」の文字を冠することから、一瀬助左衛門母は浄土真宗の門徒であったことが言える。



写真11：一瀬助左衛門母墓碑（左）、同拓本（右）

一瀬助左衛門母や一瀬助左衛門については、管見による限り、大村藩が藩主大村家の家臣（大村藩士）の系譜をまとめた「新撰土系録」（大村市歴史資料館所蔵）など文献史料に記載がないため、武家という確証は得られないが、江戸時代前期、既に名字を有してお

り、自然石とは言え、墓塔を造立していることから、湯無田郷の有力者階層であったことが考えられる。

六字名号や戒名・位号から一瀬助左衛門母が浄土真宗の門徒であることは前に考察したが、檀那寺は付近の西圓寺であった可能性がある。

## ②大サコ墓地と西圓寺の関係

大サコ墓地の近くに現在、真宗大谷派松音山西圓寺があり、西圓寺墓地（住職・武宮家）も大サコ墓地に存在するため、大サコ墓地と西圓寺が関係していることが推測できる（長崎国際大学博物館学芸員課程2019）。

安政3（1856）年、大村藩によって編纂が開始され文久2（1862）年に完成した大村藩領内の総合調査書『郷村記』全79巻の内「波佐見村上」によれば、西圓寺は3代大村藩主・大村純信の治世・寛永年間（1624～1644）に僧の釋善空によって開基された（藤野1982）。しかし、最初から上波佐見村湯無田郷に開基されておらず、開基・釋善空、2世・浄智、3世・教順までは隣の井石郷にあった光嚴寺跡に草庵を結んで住居していたとされる（藤野1982）。

そして、寛文元（1661）年に西本願寺の許可を得て、4世・了有が湯無田郷内海海道（街道）筋に「西圓寺」を建立し、寺はその後享保2（1742）年、8世・圓端によって、現在地の内海の川辺に移設された。この間、元禄13（1700）年に西圓寺は大村藩真宗寺院の本寺・正法寺が西本願寺から東本願寺に本山を変更した際、大村藩領内真宗末寺22箇寺とともに、東本願寺の傘下となり、真宗大谷派の寺院として現在に至っている（藤野1982）。

大サコ墓地内の西圓寺墓地には、個々の歴代住職の墓石は残っておらず、「南無阿弥陀佛 松音山西圓寺 武宮家」墓塔（昭和37（1962）年6月建立 西圓寺第十三世住職 釋眞勵）に合葬され、現在、西圓寺檀信徒共同墓碑（令和2（2020）年5月建立 第十九世住職 釋眞紹）とともに西圓寺墓地を形成している。西圓寺が何時から大サコ墓地を埋葬地として定めたか不明であるものの、大サコ墓地内の墓石を見れば、六字名号・戒名・位号から基本的に浄土真宗門徒の墓地が数多く点在しているため、西圓寺との関係が濃厚であったことを物語っている。

なお『郷村記』は、大村藩が編纂した領内各村の故事来歴、人口、宗旨、農業・漁業の生産高を事細かに記した総合調査書であり（藤野1982）、原史料は大村藩から明治時代に大村県、そして長崎県の所蔵となり、現在は長崎歴史文化博物館に収蔵されている<sup>(2)</sup>。

## ③三岳家墓地の石造物

万治3（1660）年銘の一瀬助左衛門母墓碑の次に古い紀年銘の石造物が三岳家墓地に存在する。場所は一瀬助左衛門母墓碑の近くにあり、同墓地の墓石を含む石造物は15基確認できる。三岳家の直系の御子孫は現在存在せず、同墓地は縁者によって守られている。

三岳家は波佐見村上居住の大村藩士であるが、「新撰土系録」卷三十八（大村市歴史資料館所蔵）の三岳家系譜によれば、初代・三岳源左衛門は肥前国塩田（佐賀県嬉野市塩田町）三岳城主で、太刀洗川の合戦で討ち死にした後、子の2代・源左衛門が三岳城没落の

後、波佐見村に居住した<sup>(3)</sup>。恐らく、同時期に三岳家が大村家家臣となったと考えられる。しかし、3代・四郎左衛門は大村領彼杵村（長崎県東彼杵郡東彼杵町）千壽寺屋敷に居住しており、波佐見村を離れている<sup>(4)</sup>。

3代・四郎左衛門には3人の男子がおり<sup>(5)</sup>、大サコ墓地に三岳家墓地を有する家系は四郎左衛門の3男・三岳孫左衛門を祖とする家系である<sup>(6)</sup>。4代・孫左衛門以降、5代・源左衛門→6代・宅右衛門（後に浅右衛門）→7代・浅右衛門→8代・宅右衛門→9代・浅右衛門→10代・半蔵（智則）→11代・柴太（智通）→12代・源右衛門（智治）→13代・貞次郎（知信）と幕末まで存続している<sup>(7)</sup>。

三岳家石造物15基の内、最古の紀年銘を刻むのが「元禄十五壬午天六月日 施主三岳浅右衛門尉」碑である。元禄15（1702）年は江戸時代中期・第5代将軍・徳川綱吉の治世である。

同碑は戒名と位号が刻まれていないことから、墓石ではなく、笠が乗っているものの明らかに別の墓碑のものであり、形状から灯籠の竿石と考えられる。寸法は高さ107.2cm、幅46cm、奥行43.5cmで、材質は砂岩で状態は良い（写真12）。

施主の三岳浅右衛門尉であるが、三岳家で浅右衛門を称した人物が6・7・9代と3人おり<sup>(8)</sup>、前掲「新撰士系録」卷三十八・三岳家系譜の各自の履歴に年号等の記載がないため特定は難しい。

三岳家墓地には、状態が非常に悪く「□月十七日 妙法□□院□□位」としか判読できない自然石墓塔が存在しているが、状態から同墓域では最古と考えられるも詳細は不明である。寸法は高さ198cm、幅46.5cm、奥行67cmで、材質は砂岩である。墓塔の中心部左右が切断され、接着された状態で残っている。

同墓地で紀年銘最古の墓石は「享保十乙巳天四月初九日 妙法清岳院了山信士 三岳浅右衛門尉」墓碑である。享保10（1725）年は江戸時代中期・第8代将軍・徳川吉宗の治世である。寸法は高さ191cm、幅63.5cm、奥行60cmで形状は相輪を伴った笠付方形塔、材質は砂岩で状態はとても良い（写真13）。

被葬者の三岳浅右衛門尉とは年代的に前掲の灯籠の竿石と考えられる石造物の施主・三岳浅右衛門尉と考えて良い。

同墓地で重要なのは、同碑に刻む被葬者の三岳浅右衛門尉の戒名と位号「妙法清岳院了山信士」である。これは前掲の紀年銘判読困



写真12：施主三岳浅右衛門尉碑



写真13：三岳浅右衛門尉墓碑（中央）

難の「□月十七日 妙法□□院□□位」墓碑と同じく「妙法」という「妙法蓮華經」の略称を冠していることから、日蓮宗の墓塔であることが分かる。従って、三岳家は日蓮宗の檀徒であることが言える。波佐見村上・下には日蓮宗寺院はないが、両波佐見村には少ないものの日蓮宗檀家が存在し（藤野1982）、その多くが隣の川棚町の日蓮宗要法山常在寺の檀家であるため、三岳家の檀那寺は、常在寺であったと思われる。常在寺は万治3（1660）年第4代大村藩主・大村純長の治世、初世・性善院日清によって川棚村に創建された寺院である（藤野1982）。

なお、三岳家墓地には大村藩の柔術指南役であった10代・半蔵（智則）の巨大な自然石墓塔と大村藩儒学者と右筆による顕彰碑（長崎国際大学博物館学芸員課程2019）、同じく大村藩の柔術指南として東北地方まで柔術の遊学を行った12代・源右衛門（智治）といった江戸時代後期から幕末にかけての墓石も存在する。

#### ④松本家墓地の墓石

三岳家墓地の元禄15（1702）年銘の灯籠の竿石の次に古い紀年銘を刻む墓石が存在するのが松本家墓地である。同墓地の墓石は11基確認できる。墓地の現状から松本家墓地はあまり参拝等されておらず、御子孫は町外へ出られたように思われる。

松本家墓地の墓石11基の内、最古の紀年銘を刻むのが「正徳六丙申天二月晦日 妙法妙祐靈尼 松本三右衛門内」墓碑である（写真14）。正徳6（1716）年は江戸時代中期・第7代将軍・徳川家継の治世である。

三岳家墓地の墓碑と同じく「妙法」という「妙法蓮華經」の略称を冠していることから、日蓮宗の墓塔であり、「松本三右衛門内」つまり、松本三右衛門の妻の戒名が「妙祐」、位号が「靈尼」であることが分かる。寸法は高さ190cm、幅79cm、奥行71cm、形状は立派な笠付方形塔で状態は良く、材質は砂岩である。

次に古い墓塔が「享保四己亥天三月十七日 妙法法山靈位 松本三右衛門」墓碑である（写真15）。享保4（1719）年は江戸時代中期・第8代将軍・徳川吉宗の治世である。

前掲「妙法」とともに被葬者の「松本三右衛門」の戒名「法山」と位号「靈位」が刻まれていることから、日蓮宗の墓塔であり、前掲正徳6（1716）年墓碑の被葬者の夫の墓碑であることが分かる。寸法は高さ180cm、幅78cm、奥行78cm、形状は立派な笠付方形塔で状態は良く、材質は砂岩である。

前掲2基の墓碑の被葬者・松本三右衛門内や松本三右衛



写真14：松本三右衛門内墓碑  
（正面碑銘）



写真15：松本三右衛門墓碑  
（正面碑銘）

門については、前掲「新撰士系録」など文献史料に記載がないため、武家という確証は得られないが、名字を有し、江戸時代中期に造形技巧が凝った墓塔を造立していることから、湯無田郷の有力者階層であったことが考えられる(写真16)。

また、前掲の三岳家同様、松本家も日蓮宗の檀徒であることが言え、両波佐見村には日蓮宗寺院が存在しないため、前掲川棚村(川棚町)の常在寺の檀家であった可能性が強い。

同松本家墓地には他に享保16(1731)年銘の墓碑も存在し、状態も良い。

### ⑤大サコ墓地の無紀年銘中世石造物

西圓寺歴代住職墓地から西側に二段下った場所に山本家墓地がある。同墓域内紀年銘最古の「元文二巳天七月七日釋休安信士位」墓碑を始原として、明治時代まで7基の墓石が確認できる。

元文2(1737)年は江戸時代中期の8代将軍・徳川吉宗の治世で、被葬者の名前は刻まれておらず不明だが、戒名「釋休安」、位号「信士位」とそれぞれ刻まれ、高さ85.5cm、幅42cm、奥行39.5cmの尖頭型板碑で、材質は砂岩である。

この山本家墓地内に下部に宝篋印塔基礎(1点)が上部に五輪塔空風輪(1点)が乗る形で存在する。江戸時代以前の室町時代後期(戦国時代)から安土桃山時代の石造物である。この2点はそれぞれ宝篋印塔と五輪塔の一部であるため、本来別々に存在していたものが後世の人為的なことから、ともに安置されたものと考えられる(写真17)。

宝篋印塔基礎は、大石一久氏(石造物研究家)によれば、16世紀前半から半ばのもので、高さ15cm、幅22cm、奥行22cmで材質は砂岩か安山岩と思われる。また、五輪塔風空輪は16世紀後半から末のもので、高さ15cm、幅13.5cm、奥行12cmで、材質は砂岩か安山岩と思われる。いずれも無紀年銘で、文字は何ら刻まれていない。しかし、大サコ墓地では今まで、近世つまり江戸時代以前の中世石造物が確認できなかったのが、今回の調査で確認できたので、大いなる成果であった。

現時点で、大サコ墓地内で確認できた中世石造物はこの2点であるため、最早これが最初から大サコ墓地に造立された石造物か、他の場所から持ち込まれた石造物かは山本家墓地を守る方々に聞き取りを行う必要があるが、いずれにしても同墓地内の成立を考える上では貴重な石造物であることは言える。

湯無田郷には、今から700年前の鎌倉時代後期・南北朝時代に内海氏という在地領主の



写真16：松本三右衛門墓碑(手前)、松本三右衛門内墓碑(奥)



写真17：宝篋印塔基礎(下部)と五輪塔風空輪(上部)



存在が文献史料から明らかになっており、郷内の館という場所に館を構え、背後の山には内海城を築き、氏神として熊野神社（湯無田郷鎮守）を祀るなどしていた（藤野1982）。室町時代後期（戦国時代）に波佐見村に隣接する武雄領主・後藤貴明が波佐見村に侵攻した際にも内海氏が防戦した話とそれに関する資料が残っており、郷内を南東方向から北西方向に流れる波佐見川（川棚川上流）を挟んで北側の湯無田・館・籠原の小字地区と境を接する小樽郷小石原には、それぞれ15世紀～16世紀末の宝篋印塔や五輪塔を中心とした中世石造物が比較的多数散見される。特に館には、特殊石造物として、永正11（1514）年9月28日銘の「南無阿弥陀仏拝石」が残存している。

しかしながら、波佐見川（川棚川上流）を挟んで南側の地域は川側の下原で確認できる1・2点を除き、同墓地を含む周辺には今まで中世石造物が管見による限り確認されず、境を接する井石郷城ノ下の井石城跡内にわずか数点の中世石造物が確認されたに止まっている。このことから湯無田郷内の中世についても調査研究の進展を今後期する必要がある。

### ⑥大サコ墓地の成立年代

以上、大サコ墓地の紀年銘最古の墓石は万治3（1660）年銘の一瀬助左衛門母墓碑であり、同人を西圓寺檀家として考え、同墓碑が西圓寺墓地付近に建塔されていることから、同墓碑周辺を始原として、墓域が拡張していったことが考えられる。これは一瀬助左衛門母墓碑付近にある三岳家墓地の元禄15（1702）年銘の灯籠の竿石とその次に古い紀年銘・正徳6（1716）年銘墓碑が存在する松本家墓地が一瀬助左衛門墓碑の近くであることから言えよう。

さらに西圓寺歴代住職墓地の隣に山口家墓地があり、山口家は西圓寺檀家であるが、同家墓地最古の紀年銘を刻む「享保十二未天十一月十八日 釋淨智靈位 山口勘右衛門」墓碑が存在する。寸法は高さ71cm、幅30.3cm、奥行22.5cmで形状は方形塔、状態は良く、材質は砂岩である。被葬者の山口勘右衛門の戒名「釋淨智」、位号が「靈位」であり、享保12（1727）年は江戸時代中期、山口勘右衛門は前掲「新撰士系録」など文献史料に記載がないため、武家という確証は得られないが、名字を有し、江戸時代中期に墓塔を造立していることから、湯無田郷の有力者階層であったことが考えられる。これも西暦1700年代前期の墓碑であるため。大サコ墓地の中では比較的古い。

従って、以上のことから大サコ墓地の東側中端から西・北・南方向に墓域が拡大して行ったと考えたい（図3）。

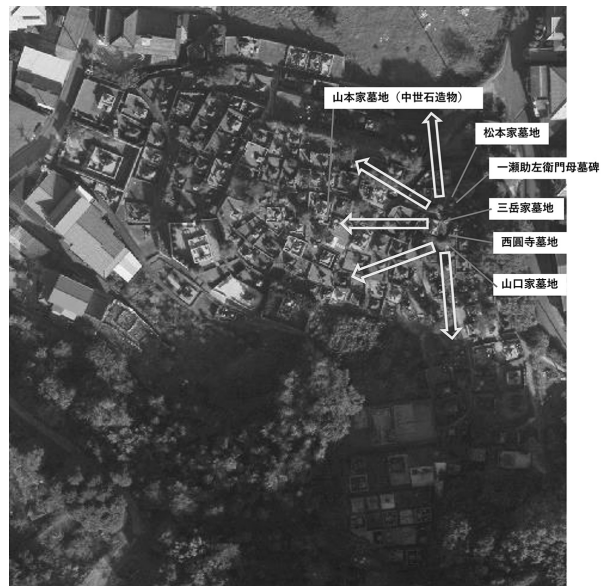


図3：大サコ墓地の墓域の拡大

（盛山）

### 3. 大サコ墓地採集陶磁器

墓地やその周辺の地表面には、陶磁器片の散布がよく認められる。その多くは、かつては故人へのお供え物をいれる容器（「供献具」）として使用され、その後、破損等によりゴミとして廃棄されたものである。これら陶磁器片を分析することによって、墓地の成立年代や時代による供献具の変化等、様々な歴史事象の一端を把握することができるであろう。本節では、大サコ墓地で採集された陶磁器の分析を試み、そこから看取される諸様相についてまとめてみたい。

#### ①大サコ墓地採集陶磁器の分析

大サコ墓地で採集された陶磁器片は破片点数で711点を数えた。まず、これら陶磁器の生産地であるが、大サコ墓地が所在する波佐見は、近世以降、肥前磁器生産の一大拠点であり、また、当該墓地は窯場から近距離に位置することから、とくに磁器に関しては、時代を問わずその多くは波佐見諸窯産と考えている。なお、陶器は若干数採集されているが、その産地等は不明である。また、磁器の釉装飾について今回点数化していないが、近世はほぼ染付で青磁が僅かにみられる程度、近代以降は染付を主体とするものの青磁・色絵・釉下彩等も一定量みられるという状況を呈していた。

ここでは、採集陶磁器の属性の中から製作年代と器種を選択し分類を行った（表1～3）。製作年代については、大きく「近世」〈江戸時代〉、「近代」〈明治元（1868）年～昭和20（1945）年〉、「現代」〈昭和20（1945）年～現在〉の3期に分け、「近世」は、17世紀末～18世紀中葉と18世紀後半～19世紀前半に細分した。以下、時期毎に器種等の諸様相をみていく。

#### ①近世〈江戸時代〉

表1 大サコ墓地採集遺物点数表（近世）

		碗	鉢	皿	香炉	瓶	徳利	瓶or徳利	不明	計
近世	17C末～18C中	8	0	0	1	1	0	0	0	10
	18C後～19C前	71	2	3	1	12	2	10	1	102

近世の陶磁器は112点を数えた。その中で最も古いものは、17世紀末～18世紀初頭頃の青磁香炉である。なお、大サコ墓地において現在のところ確認されている最古の紀年名墓は万治3年（1660）銘であり、今後、17世紀後半代の資料が採集される可能性はあるだろう。17世紀末～18世紀中葉の採集品については、点数的に少ないものの碗を主体としていた。18世紀後半～19世紀前半では、碗の点数が著しく増加する。碗はそのほとんどが、基本的に飯などを食する際に用いられた「飯碗」であり（写真18）、液体を飲むためのうつわである小型の「湯呑み碗」は少なかった。また、この段階には、鉢、皿、瓶、徳利といった新たな器種が登場する。とくに、瓶・徳利に関しては、波佐見諸窯では基本的に19世紀以降に生産量が増加するものと考えている（中野2019）。なお、瓶では、波佐見諸窯で主に19世紀代に生産された海外輸出窯の酒や醤油を容れる瓶である「コンプラ瓶」（写真

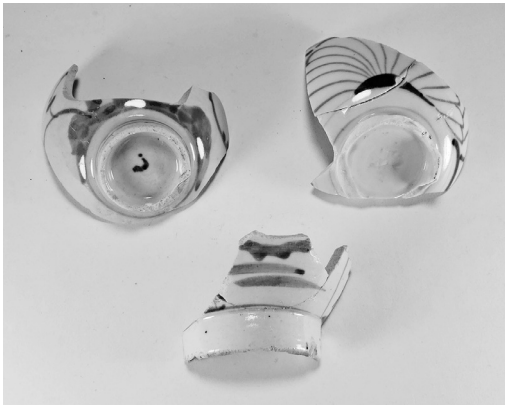


写真18：飯碗



写真19：コンプラ瓶  
(左：参考品、右：採集品)

19) も1点確認されている。近世全体では、碗の破片点数が79点(71%)と最も多く、当該墓地における近世代の主要な供献具は碗、とくに「飯碗」であったとみられる。

## ②近代〈明治元(1868)年～昭和20(1945)年〉

表2 大サコ墓地採集遺物点数表(近代)

近代	明治元年～	碗	鉢	皿	香炉	瓶	徳利	瓶or徳利	蓋	花生け	壺	甕	すり鉢	碇子	不明	計
	昭和20年	50	0	0	5	105	39	5	4	1	1	2	1	1	2	216

近代の陶磁器は216点を数える。瓶が105点(49%)とほぼ半数を占め、また、徳利も39点(18%)あり、近世における碗を主体とする様相とは大きく異なる。近代の波佐見諸窯では瓶・徳利を大量に生産しており(波佐見町史編纂委員会1981)、この点数の多さは十分納得できるものである。瓶は葡萄文、徳利は文字文や牡丹文が多い(写真20)。碗については「飯碗」よりも「湯呑み碗」が多くなる。特殊な製品としては、電線等を固定する碇子(写真21)がみられた。線香立てとして代用されたようである。



写真20：葡萄文瓶(左)  
文字文徳利(右)



写真21：碇子

### ③現代〈昭和20（1945）年～現在〉

表3 大サコ墓地採集遺物点数表（現代）

近代	1945年～	碗	鉢	皿	香炉	瓶	徳利	瓶or徳利	蓋	花生け	壺	甕	すり鉢	窯道具	不明	計
	昭和20年	310	6	9	11	10	0	0	4	3	7	1	0	6	16	383

現代の陶磁器は383点を数えるが、碗が310点（81%）と最も多くなる。うち「湯呑み碗」は225点、「飯碗」は12点であることから、当該墓地における現代の代表的な供献具は「湯呑み碗」（写真22）と言える。近代で最も多かった瓶は激減し、わずか10点に留まった。また、現代における特徴的な様相としては、観音菩薩がプリントされた碗（写真23）、経文が記された碗など、供献用に特化した意匠を持つ製品の増加があげられる。



写真22：湯呑み碗



写真23：観音菩薩文湯呑み碗

### ②考察

ここでは、以上の成果に基づきながら、大サコ墓地における採集陶磁器のうち点数の多い碗と瓶・徳利を中心に、変遷及びその背景についてまとめてみたい。

近世代は、碗、とくに「飯碗」が主要な供献具であり、19世紀に入ると瓶・徳利がそれに加わる。一方、近代においては、瓶・徳利が大幅に増加し、また、碗の主体は「飯碗」から「湯呑み碗」へと移行する。

碗の変遷は、その要因として、「湯呑み碗」の増加及び一般化、供え物の内容物の変化、墓参における風習の改変などが想定されるものの、現段階では明確な答えは出せていない。今後の課題としたい。

墓地における瓶・徳利は、基本的に墓前を飾る花を生ける「花生け」として使用されていたと考えられる。花生けは、近世代は竹筒等を用いたとみられるが、前述した19世紀～近代にかけての波佐見諸窯における瓶・徳利の量産及び普及に伴い、竹筒等から耐久性の高い瓶・徳利に取って代わったと想定できる。また、大サコ墓地は窯場に比較的近い位置にあり、当該墓地の関係者は瓶・徳利を入手し易い環境にあったことも、瓶・徳利の多さの一因としてあげられよう。ただし、これについては、窯業地から遠い農村地等の墓地における様相との比較を踏まえて再び検討する必要がある。

現代では、碗が再び代表的な供献具となる。碗は「湯呑み碗」が主体であり、近代の状況をそのまま受け継いでいる。しかし、瓶・徳利の点数は激減していた。これは、現代における墓の変化がその背景にあると考えられる。昭和20年代後半には機械導入により墓石の石材加工が容易となり（吉澤2003）、墓標である竿石や台座のみならず、花生けも石で作られるようになった。その結果、近代では花生けとして盛んに利用された瓶・徳利は不要になったものとみられる。また、とくに徳利については、波佐見諸窯では昭和10年代頃に生産を大きく縮小するとみられ（神崎ほか 1998）、この点も激減の理由の一つにあげられるであろう。

以上、大サコ墓地採集陶磁器の諸様相について、碗、瓶・徳利を中心にまとめた。今後の研究として、まず、大サコ墓地では時代毎にどのような階層及び生業の方々方が埋葬されてきたかという被葬者の歴史的変遷を明らかにし、今回判明した採集陶磁器の推移とを照らし合わせる作業が必要となるだろう。さらに、波佐見町内の他の地区や町外の墓地における様相との比較検討作業も欠くことはできない。以上の作業を通して、大サコ墓地における近世から現代までの供献具、ひいては墓制の特徴について、より深くより総合的な把握が可能となるであろう。

(中野)

#### 4 調査の成果

本研究は、学芸員養成課程における共通の課題である「実践的な知識と技能を有する学芸員の養成」を、地方自治体と大学の連携によって達成しようと試みた研究である。旧来、現場で即戦力になり得る学芸員養成が要望されてきたが、学内実習と10日程度の館園実習では実務に耐えうる知識・技術を修得することは困難であった。学芸員の実務である収集・調査研究・展示を学生時代から経験することで、大学で講義・実習を受講するだけでは得られない実践力を学生に身につけさせることを本研究の意義として掲げた。

研究の結果、本学側は、地域の学芸員と共に学生の調査能力、整理作業能力、展示能力を養うことができた。特に現地調査および整理作業の能力は、座学では涵養できない技能であり、これを学芸員の指導のもと約1年間にわたって実践できたことは、館園実習以上の知識・経験の取得に繋がったといえる。本研究で修得した調査・研究・資料管理能力は、特に日本の博物館の大多数を占める人文系の地域博物館において求められる能力であり、学生の時分に当該能力を涵養することで、学芸員としての活動に直結できると判断される。実際に、本研究に参加した学生は、本研究以外の調査・研究活動においてもここで培った技術を援用し、活動を実践している。例えば、佐世保市教育委員会からの委託事業である宮地区公民館の文化財調査、同教委との共同研究による佐世保市世知原炭鉱資料館の収蔵資料調査、西海市西海町横瀬郷での学術発掘調査などが代表例として挙げられ、中でも世知原炭鉱資料館の調査では本研究に参加した学生が他の学生を指導する形で能力・技術の伝承が行われており、学生たちの技能向上に効果があったと判断される。

また、調査で得られた成果は、地方自治体の博物館においても研究の蓄積となり、将来にわたって活用することが可能である。町側としては、これまで未解明であった大サコ墓

地の成立および推移を、墓碑銘と陶磁器の両面から把握でき、郷土史の解明に効果があったといえる。

本研究は、コロナ禍の影響で十分な調査・研究が展開できなかった点も多い（対面作業の禁止、施設の使用禁止、図書館の入館禁止等）。また、当初の計画では、大学の公開講座の一環として町学芸員の講座を企画していたが、緊急事態宣言等の影響から中止となった。今後は、感染状況を注視しつつ、徐々に実施していきたいと考えている。さらに、本研究で把握した情報や収集資料は、実測作業等が終了した段階で町教委に移管し、次年度以降は「波佐見町歴史文化交流館（仮称）」の収蔵資料として活用する予定である。

（中島）

## おわりに

長崎国際大学は平成12（2000）年から博物館学芸員課程を開講し、年間30名以上の学芸員有資格者を輩出している。また、本学大学院では、博物館学に在籍する大学院生が修士、博士ともに大多数を占めており、国際観光学科でありながらも大学院に進学する学生は博物館学の研究を目指している。したがって、博物館学教育は理論のみならず実践力の強化を図る必要性が求められている。

この点においては、中島助教が学芸員資格取得を目指す学部生を対象に、展覧会の企画を通して展示の技術や、地域の発掘現場で埋蔵文化財の調査方法を指導している。また、地域文化資源を通じた学外活動に学生たちを積極的に参加させることで、大学院前教育の強化を推進している。このように学部の博物館学と大学院の博物館学との連携力は高く、年間の学芸員資格の輩出者は少ないものの、質の高い博物館学教育を実践している。

近年では、観光や地域創生の視点から博物館を論ずることが博物館学の主流の一つとなっており、保存が第一義であった文化財を積極的に活用することが求められている。地方教育行政の組織及び運営に関する一部改正により、文化財の保存と活用は国主体から地域主体で実践できるようになり、地域の文化財行政や学識者たちによる、より効果的なまちづくりや地域文化財の保存と活用が可能となったことは周知の通りである。

波佐見町の地域文化資源の調査を通して学生たちはフィールドワークで多くを学び、学芸員としての基礎的技術を実践的に身に付けている。博物館学芸員課程では現代社会に求められる学芸員教育の実践の場として波佐見町の地域文化資源を活用し、波佐見町にはその成果を還元している。

令和3（2021）年4月に波佐見町に新たな博物館が開館する。博物館学芸員課程が実践してきた波佐見町内文化財の共同調査の研究成果が、博物館の展示に供されることの意義は大きいと考える。今後も波佐見町と協働した実践的な学芸員教育はさらに幅広い活動が求められることが予測される。地域の大学として、地域のための博物館学を実践していくことが地方大学の役割と考えている。

（落合）

## 註

- (1) 「古文書から見た境目における大村藩と平戸藩展－波佐見町所蔵・寄託史料を中心に－」  
解説パンフレットより抜粋
- (2) 註1と同じ
- (3) 「三岳家系譜」大村家史料「新撰土系録」卷三十八 大村市歴史資料館所蔵
- (4) 註3と同じ
- (5) 註3と同じ
- (6) 註3と同じ
- (7) 註3と同じ
- (8) 註3と同じ

## 参考・引用文献

- 大村市史編纂委員会（1962）『大村市史』上巻、大村市役所
- 大村市史編さん委員会（2014）『新編大村市史』第二巻 中世編、大村市
- 大村市史編さん委員会（2015）『新編大村市史』第三巻 近世編、大村市
- 奥川光義、波佐見史談会（2002）『波佐見二十二郷の風土記』波佐見史談会
- 落合知子（2017）「学芸員養成課程のグローバル化における課題と展望－上海大学博物館  
学研修を事例として－」『國學院雑誌』第118巻第11号、國學院大學、pp.19-33
- 落合知子、波佐見町教育委員会（2020）『地域を活かすフィールドミュージアム－波佐見  
焼窯業地のまちづくり－』雄山閣
- 神崎宣武、興倉伸司、矢島吉太郎（1998）『とっくりのがんばり』TaKaRa酒生活研究所
- 長崎国際大学博物館学芸員課程編（2019）『平成30年度長崎国際大学学長裁量経費採択「地  
域文化資源を利用したMLA連携による博物館展示教育の実践」実施報告書』長崎国際  
大学博物館学芸員課程
- 中野雄二（2000）「波佐見」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 中野雄二（2019）「近世波佐見諸窯における酒に関する磁器製品」『近世の酒と宴』「近世  
考古学の提唱」50周年記念研究大会実行委員会
- はさみ観光ボランティアガイド協会（2013）『はさみ観光ボランティアガイド養成用はさ  
み観光ガイドブック』はさみ観光ボランティアガイド協会
- 波佐見町史編纂委員会編（1976）『波佐見史』上巻、波佐見町教育委員会
- 波佐見町史編纂委員会編（1981）『波佐見史』下巻、波佐見町教育委員会
- 藤野 保（1982）『大村郷村記』第三巻、国書刊行会
- 盛山隆行（2018）「波佐見村の大村家家臣－「郷村記」にみる禄高の形態－」波佐見町文  
化協会編『波佐見文化第31号』波佐見町文化協会
- 吉澤 穆（2003）「墓石に関連する機械・工具について」『日本人のお墓』一般社団法人日  
本石材産業協会

**研究参加者（50音順、敬称略、学生の所属は調査参加時点）**

【長崎国際大学 教員】 落合知子、中島金太郎、

【長崎国際大学 大学院生】 鐘ヶ江樹、鐘ヶ江幹、西浦日菜乃

【長崎国際大学 学部生】 太田千晴、太田直宏、王楷之、川原翔、近藤あかね、田川太一、  
築城ひかる、中武秀元、奴留湯蓮、松田光汰、吉岡和

【波佐見町教育委員会】 太田克宏、中野雄二、盛山隆行